

第二百三十一話 戦訓活用の好事例と敵将の激賞（真偽は不明なれど）

第三十七話 我が将兵の敢闘、此処にあり！（3）副題：ペリリュー島の敢闘と美談で述べたペリリュー島の戦いに関する話題を二点記す。

1 ペリリュー島の戦い概要

太平洋戦争中の1944年9月15日から11月27日にかけてペリリュー島で行われた、日本軍10,500名と米軍2個師団約5万名との陸上戦闘である。要塞化した洞窟陣地などを利用した組織的な防衛戦闘により、米第一海兵師団は全滅判定を受け、陸軍81師団に交代させられた。

然しながら、補給なき日本軍の抵抗は次第に衰え、11月24日玉砕を決定した。玉砕電報「サクラサクラ」を発し、残存兵力55名による「万歳突撃」を敢行して日本軍の組織的抵抗は終わった。二三日で方がつくと豪語した米軍であったが、占領に二ヶ月半を要したのである。

2 戦訓の活用

ペリリュー島の戦いで日本軍が大健闘した要因には当然第14師団歩兵第二連隊長中川州男大佐の類稀な統率があったことは当然であるが、貴重な戦訓の適切な活用があったのである。連隊長は、情報参謀堀栄三（第百五十七話参照）作成の「敵軍戦法早わかり」の説明受け（1944/3）及び大本営発行の戦訓特報第28号（1944/7/20）を参考にしたという。その要点は以下の通りである。

- ・砲爆撃対策と対戦車戦闘は対米戦の運命を決する二大項目である。
- ・戦車には砲撃と肉弾戦が有利
- ・縦深陣地は絶対に必要、複郭陣地も準備必要
- ・熾烈な砲爆撃特に艦砲射撃に対し、築城により兵力・資材をなるべく貯存して、敵に近迫して白兵戦に持ち込む訓練を行う
- ・砲爆撃により、幹部の死傷者が増え指揮組織が崩壊した時に対する事前対策、特に中隊長級指揮官の統率力の強化
- ・戦況が切迫してきた際は直接戦闘に関係ない土木作業（飛行場設営など）に無用な人力はかけず、陣地構築に集中する。

厳しい築城条件の中で、一年をかけて島全体を要塞化していたのであり、この戦訓は硫黄島、沖縄でも活かされた。



3 ミニッツ提督日本軍激賞の詩文

ペリリュー島には、1934(S9)年創建の南興神社(ペリリュー神社)があり、戦後の1982(S57)年再建された。

守備隊の抗戦は米軍の予想をはるかに上回る敢闘であり、ペリリュー島神社に建立された碑には米太平洋方面艦隊司令長官C・W・ニミッツの言葉も刻まれている。

「諸国から訪れる旅人たちよ この島を守るために日本軍人が
いかに勇敢な愛国心をもって戦い そして玉砕したかを伝えられよ
米太平洋艦隊司令長官 C.W.ニミッツ」(英文略)

ニミッツは、戦艦ミズーリ号上で行われた大日本帝国の降伏文書調印式で米国代表も務めた。東郷平八郎元帥の心酔者としても知られる。

この碑文について明確な証拠が提示されておらず、未だに真偽不分明であるが、マッカーサーと並立する米軍の対日進攻軍最高指揮官であり、日本軍の敢闘ぶりとニミッツならば然もあらんと考えたい。碑文の真偽はともかく、日本軍の敢闘は真実だ。

(了)